

様々な人・組織をつなぎ『福』を呼び込む

鶴見寺尾地区福祉のまちづくり推進協議会（通称：てらお福まち）

活動のきっかけ : 山坂の多い地区の課題を解決する様々なアイデアが出てきたこと
 エリア : 鶴見区寺尾地区
 活用した手法等 : 第6回横浜・人・まち・デザイン賞受賞団体（平成25年度）



『てらお奉行プロジェクト』高札設置の様子

「てらお福まち」の活動

寺尾地区は、戦後比較的早くから開発された丘の上の住宅地です。山坂の多い複雑な地形の上に幅の狭い道路が通っています。かつての企業社宅が新たな集合住宅へと建て替えられ、若い世代が移り住んでくる一方、古くからの住宅地では高齢化が進み、それに伴う多くの地域課題を抱えています。

「てらお福まち」は、まちに住む人たちを中心とした「自分たちのできることからまちを良くしていこう」という考えで進められている活動です。かねてから地域では寺尾地区の様々な課題を解決する活動やプロジェクトが地域ケアプラザを拠点として展開されていました。平成16年度、福祉のまちづくり条例に基づく「福祉のまちづくり重点推進地区」に指定されたのを契機に更に様々な人や組織がつながるようになり、現在も活動が継続されています。

区と地区社会福祉協議会を単位とした健康で住みやすいまちにするための計画である、鶴見区地域福祉保健計画「鶴見・あいねっと」とも連携しています。

活動の秘訣

「てらお福まち」の活動は代表者会で合意・承認を得ますが、具体的

な取組の企画・実施は作業部会が担っています。作業部会は趣旨に賛同し何かをしたいと思う人が参加し、提案し実行する場です。

「誰かが提案した時は否定しないで『とにかくやってみよう』と呼びかけます。その結果、一緒に取り組もうという人が出てきますし、できなければ時期を待つこともあります。イベントなどの参加者には作業部会に来ないかと誘います。100人に声をかけて、来るのは1～2人。でも、来てくれる人は積極的に活動してくれます。そのような姿勢が活動を継続し広げる秘訣。」と作業部会の部会長は話します。

寺尾の課題を解決するハード整備

会議やまち歩きといった様々な活動を行うことで、まちの多くの課題が見つかります。その時には、土地・建物の所有者との話し合いや、行政とのプロジェクトを立ち上げて、目に見える形で解決してきました。

歩道が狭く、近隣の学校の下校時に歩行者があふれてしまうバス停では、多くの人がバス待ちできる空間を整備しました。坂が多いため、高齢者が買い物などの外出に苦労している課題に対しては、坂道の途中に地元のボランティア手作りのベンチを置き、誰でも気楽に休憩できるよう

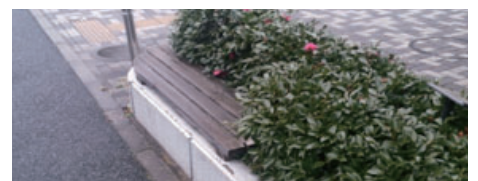
にしました。これらは現在でも多くの方々に活用されています。

まちをつなぐ「てらお奉行プロジェクト」

「てらお福まち」の会長は活動が始まった頃から活動しているアイデアマンです。例えばイルミネーションで通りを彩る「スターロード」。最近では地域の隠れた歴史を拾い上げて高札にするという、「てらお奉行プロジェクト」を立ち上げました。「人をつなぐ、まちをつなぐ、区や市とつなぐ」をスローガンとして、まちの活性化を目指しています。

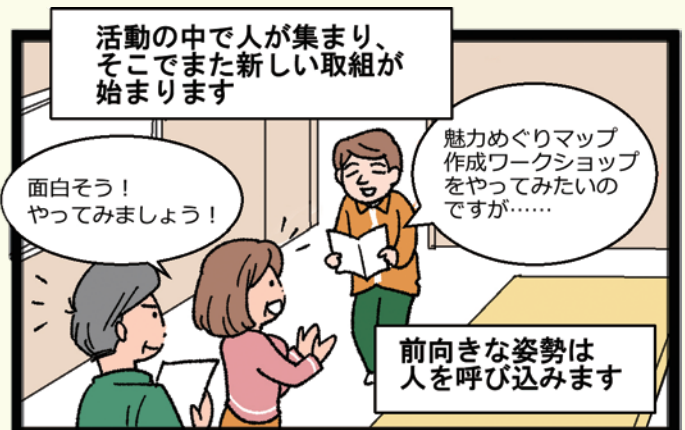
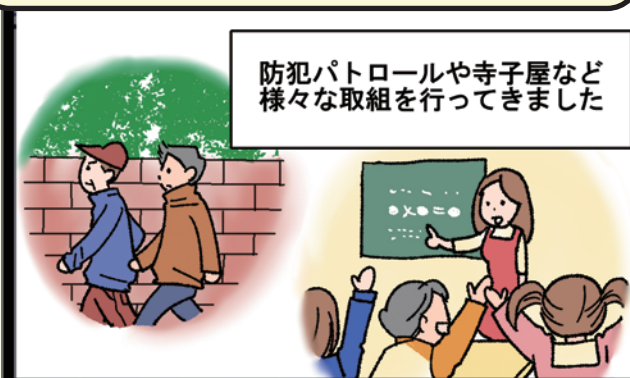
まちづくりを始める人へ

「会議は楽しくないといけない。毎回本当に楽しい。いい意見がたくさん出てきます。無茶振りでもいいので、毎回全員の意見を聞くことが大切です。一人でも多くの人と知り合ったらそれが宝物です。人それぞれの強みを生かして活動を進めていくことも大切です。」(てらお福まち 会長より)



坂道に設置された手作りのベンチ

ポイント⑤ みんなでまちを育てていこう



拠点から広がる元気いっぱいのもちづくり 庄戸の元気づくり実行委員会

活動のきっかけ : 区役所からの活動への呼びかけに町内の有志が集まったこと
 エリア : 栄区庄戸及び近接地区
 活用した手法等 : 地域の元気づくり事業(栄区自主企画事業)



就学前の子供たちを対象にした拠点内活動「すすく」

高齢者が元気に暮らせるまちを目指して

庄戸地区は、栄区の南東部に位置し、昭和48年に開発が始まった戸建中心の住宅地です。緑が多くゆったりとした良好な住環境のため、住み続ける人の多いまちですが、開発から40年近く経ち、住民の高齢化が顕著になってきていました。

平成19年、「高齢者が元気いっばいに暮らせるまちを目指して活動しませんか?」という相談が、区役所福祉保健課から庄戸地区の5つの町会にありました。役員からは、町会で担う仕事や行事も多く、高齢化も進んでいるため、町会活動との兼務は難しく、引き受けられないという意見が多数でした。そこで、各町会で活動の趣旨に賛同する有志を募って検討しよう、ということになりました。

アンケートを行ったところ、21人もの方が手を挙げました。町会や役員などの経験者だけでなく、勤めていた頃は地域の活動にほとんど関わりがなかった人や、転入してきて地域に早く溶け込みたいと考えていた人などが集まり、町会の活動とは独立した、「庄戸の元気づくり」と題した有志による実行委員会の活動が始まりました。

空き家を拠点に

最初とはにかく自由に様々な意見

やアイデアを出し合いました。まずは、今すぐに実行できる、①乳幼児からお年寄りまで、お互いに仲良く過ごせるまち、②街中で会ったら笑顔で挨拶ができるようなまち、をつくることを目標にしました。その後、活動の拠点の必要性が高まり、地区内の空き家を活用して整備することになりました。

空き家を活用することは、家庭的な温かい雰囲気、利用者が来やすく、さらに活動に必要な物品を保管できるという大きなメリットがあると考えました。しかし拠点として使用できる空き家を探すのはとても大変でした。約50件もの空き家で交渉しましたが、家賃などの条件がなかなか合いません。どうしようか困っていた時、活動メンバーの知り合いが、趣旨に賛同して、空き家を好条件で提供してくれることになりました。

その後、区の助成制度を活用し空き家を拠点として改装・整備しました。空き家を活用した活動は今や「庄戸の元気づくり」の中核となっています。

拠点が活動の展開の源に

拠点を会場に、就学前の子供たちを対象にした「すすく」、高齢者をはじめ多世代が対象の「花水木」というサロン活動を各々週1回開催しています。また、サロンで高齢者から

出た要望に応じて、庭の草取り、網戸の修理などの力仕事を手伝う「くらしの応援隊」を結成しました。その他小中学校と連携し「あいさつ運動」を行うなど、様々な「元気づくり」に取り組んでいます。

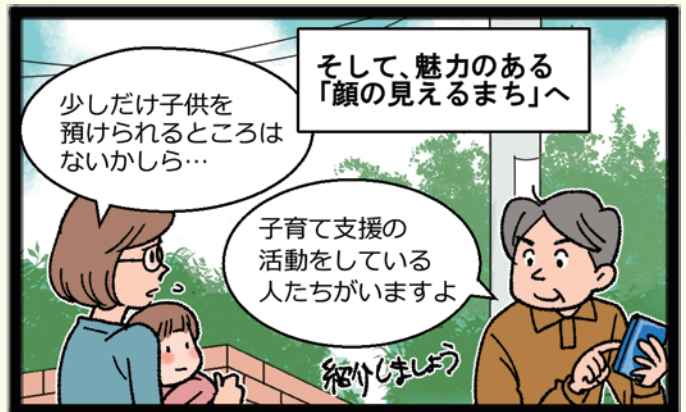
活動を続ける事で、「地域の中に知り合いが増え、挨拶や声をかけられることも増えました。」と、実行委員会の副委員長は話します。今では「庄戸の元気づくり実行委員会」は、困った時に頼ってくれる存在として地域の多くの人に認識されています。

まちづくりを始める人へ

「自分たちが楽しむことが一番大事だと思います。義務感でやろうと思うと長続きしません。何をやりたいのか明確にして、その中でも実現しようとする事。そこから活動は広がっていきます。成功例をつくる事が大事です」(庄戸の元気づくり実行委員会 事務局局長より)



活動拠点である「サロン庄戸」



活用した

活動の助成

「アドバイザー」の派遣

整備助成

その他

活用した手法

プラン

ルール

その他

女性の笑顔で地域をつなぐ

NPO法人 ディアナ横濱

活動のきっかけ : 「美」を生かした活動をしたいという思いを共有した仲間が集まったこと
 エリア : 西区浅間町
 活用した手法等 : ヨコハマ市民まち普請事業



ディアナ横濱
Café & Salon

女性が笑顔になる活動を

女性の「美」をテーマにしたコミュニティサロン「ディアナ横濱Café & Salon」は、横浜駅に近く、都市化の流れと昔ながらの街並みが共存する西区浅間町にあります。

「ディアナ横濱」を立ち上げたメンバーは、女性の多様化する生き方や幸せについて考え、誰でも気軽に立ち寄れる居心地の良い空間で、女性が笑顔になるような活動をしたいという思いを以前から共有していました。その思いを実現するため、自分たちの得意な「美」を生かした活動をしようと仲間が集まり様々な取組が始まりました。

『ディアナ＝女神』という言葉には、「世代を問わず全ての女性の笑顔で、地域を明るく元気にしたい。」という思いが込められています。

活動の意義を確信

最初は、地区センターなどを借りてメイクレッスンを行う講座から活動を始めました。その後、他の講座も開催し、活動を徐々に広げて行きました。

ある日、高齢者施設へボランティアでメイクに行った時のことです。初めは遠慮していた方が、メイクにより他の人がきれいに、笑顔になっていくのを見て、「私もメイ

クをしてほしい」と積極的に声をかけてきたり、またメイクを行うことにより認知症の方が昔のことを思い出し始めたり…。やがて、会場が笑顔でいっぱいになりました。「『美』は女性の笑顔や元気の源。女性の笑顔は家庭や地域の元気につながる。私たちのしたかったことはこれだ！この活動を日常生活の中に広げていきたい。」と考えるようになりました。

拠点により広がる活動

場所を借りての活動は、時間が制限されてしまうなどの課題があり、いつでも使える拠点が必要であることが分かってきました。

そこで、空き店舗になっていた物件を拠点とすることにしました。しかし、コンクリートや地面がむき出しの場所でメイクレッスンなどの講座を行っても、普段の生活とは違う特別な雰囲気を演出することができません。「このままでは『美』の提供は難しい。」という新たな悩みが出てきました。

そんな時、「ヨコハマ市民まち普請事業」を知りました。応募した年はより良い提案にするため活動を展開し、同時に慣れない書類の作成、仕事と活動の両立などに大変苦労しました。

しかし、コンテストへの準備のための活動を始めると、徐々に賛同者が増え、自分たちのコンセプトが間違っていないという確かな自信にもつながりました。

さらに、整備予定場所でプレオープンしたことで地域の人々と新たな交流が生まれ、自治会からも背中を押してもらうことができました。

二次コンテストを通過し、整備が完了してから1年以上が経過しましたが、女性が楽しめる講座や手作り小物の販売を行い、地域の方が講師となって「活躍する場」として、また美味しいコーヒーを楽しむ「くつろぎの場」として、人と地域をつなぐきっかけの「場」となっています。

まちづくりを始める人へ

「自分たちのまちをもっと好きになりましょう。私たちは自分のまちをより良くしようと考えるようになりました。そういう人が増えれば、横浜はもっと良いまちになっていくと思います。」(NPO法人ディアナ横濱 メンバーより)



まち普請コンテストの様相

ポイント⑥ みんなの思いを形にしよう



活動のポイント